希
のぞみ

希　06

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15764248

ヒュンマ

ダイ大　ヒュンマ小説です。twitter/miya_haniwa555
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。ヒュンマ、ポップ→←メルル、ダイレオ、アバフロ前提でお話が進んでいます。
◇マァム視点　◆ヒュンケル視点
この辺りから、独自解釈がさらに増えております。ご注意願います。
PixivさまのTwitterリンクは驍泰アカにルーラします。

希　06

　◇

　どどんとそびえ立つ、煉瓦造りの洒落た建物。
　レオナ紹介の仕立て屋だ。
　オーダーメイドも既製品も扱っているらしい。
　正直に言えば足が竦む。
　ネイル村にいた頃は、たまに行商で訪れる商人から購入したり、布を買って自分で仕立てたり、近くの町まで出たついでに購入したりで、レオナのようにたくさんあるものから選んで身に付けるということはなかった。
　対戦が終わり、レオナやパプニカ王宮の人と話す度に、世界が違うと感じてしまう。
　汚れたからすぐに捨てたり、取り替えたりなんてできない。大事に繕って、大切に着るのがネイル村流だ。もらったものに悪態を吐くというのもよくわからない。私に似合うと仕立てられた物を嫌がるのは相手に失礼だとも思う……まあ、多少の文句くらいは言うし、ちょっとのアレンジをしたりはするけれど。

　店内に入ると、一階は既製品が多く、入って右側が女性服、左側が男性服と別れているようだ……私が欲しい動きやすい服は、このお店の雰囲気に合っていないのではないだろうか。入った瞬間、違和感が溢れ出す。
　……場違い、よね。
「……何が違うのか、よくわからんな」
　たまたま入り口近くにあったので覗いてみた、ワンピースのコーナーでヒュンケルが途方に暮れた声を出す。笑いたくなるが、私も同じ気分だ。
　ここは『お嬢様』の室内着のコーナーのようだ。戦って、こまめに動いて、働く『村娘』の私には似合うとも思えない。

もちろん、卑下して言う訳じゃない。
　私はネイル村の出身だということを誇りに思っているし、私たちみたいな村人がいるから、国がなり立つのだとも思っている。
　毎日精魂込めて働く私達も、雨の日や仕事ができない日は、一日中家の中にいる。お金持ちのお嬢様たちは毎日そうするのだろうけれど……私は忙しく働いていた方が気が楽だ。ただ毎日をなんとなく過ごすのは性に合わない。
　でも……

　晴天の庭園で、優雅にお茶を嗜むヒュンケル。
　陽の光に照らされた銀髪。思ったよりも白い肌。
　白いブラウスは、胸元がヒラヒラしている。そこは薔薇の咲き誇る庭園で、テーブルの上には洒落たお菓子。真っ白なテーブルクロス。

　……堪えろ、顔面。
　笑い出したら怪しまれる。
　似合うけれど、似合わない。
　きゅっと変な形で唇を噛み締める。
「……マァム？」
　隣から怪訝そうな声が聞こえた。
「ヒュンケルの服から見ましょうよ。ほら、真っ白なシャツ、とか、上着とか」
　ぷくく。と漏れる声で上手く喋れない。
「いや、オレはいい。繊細で破きそうで怖い。オレより、マァムの服を選ぼう」
　彼はそう言うと、女性用の外出着のコーナーを見つけ歩き出す。
　見た目はお貴族様？　と疑いたくなるような優美な彼も、私と本質は似ている気がする。
　意外と大雑把。
　細かいボタンがビッシリと付いた服なんて、きっとバリリィッと

破いてしまうに違いない。なんて。でも、途中まで外したら丸首のシャツみたいに脱いでしまうんじゃないかな……私だったらそうしてしまう。
「お客様」
「え、はい？」
　店員に声を掛けられてビックリしてしまう。先に気が付いていただろうヒュンケルが、私と店員の間でやや警戒をしている。まるで近衛騎士や護衛、番犬のようだ。
「失礼ですが、ヒュンケル様とマァム様でしょうか？」
　その質問に頷けば、「レオナ姫より伝言を承っております」と店員がにこやかに言う。
　レオナに……完全に遊ばれている気がする。
　あれよあれよと店員に二階まで連れていかれ、あらゆる場所を採寸される。そして、そのまま着せ替え人形にされてしまった。
　ヒュンケルも採寸をされたという。なぜ？　と思っていたら採寸は結婚式で着る衣装のためだそうだ……レオナ……
「こちら、旅行でも重宝する皺になりにくい生地で仕立てたワンピースでございます」
　にっこりと薄紫のワンピースを試着させられる。ライラックやラベンダーを彷彿させるやさしい……ヒュンケルがよく身に付けている色合いよりも、少しだけやわらかい色。
「他にお色違いもあるんですよ」
　店員さんはにこやかにモスグリーン、ローズピンク、オフホワイト、スカイブルーの、ちょっとずつフリルの付け方が違うワンピースを取り出した。
「迷いますね」
「こちらのお品は、くしゃくしゃと畳んで鞄に入れても、広げると綺麗に伸びるので、複数持っていても重宝しますよ」
　店員さんの『にっこり』という笑顔に上手いなあと素直に感心する。押し付ける訳ではないけれど、オシャレもしたい女性心を上手にくすぐってくる。普段の旅なら気にしないけれど、ヒュンケルと一緒ならこんな可愛い服を持っていてもいいかもしれない。
「マァムは何色がいい？　オレはこれかな……マァムに似合いそう

だ」
「私は……これかしら」
　中でも可愛い色だと思う薄紫を手に取っていたら「これとあちらもください」と、ヒュンケルが薄紫とローズピンクのワンピースを購入してしまうことに決めていた。
　あとは旅装もいくつか試着させてもらう。
　大戦時に着ていたような鮮やかなピンクではなく、長袖、長ズボンの普段と似ている旅装に、ヒュンケルのようなマント。上掛けにもなるし便利だ。
　こんなふうにのんびりと服を選ぶなんて、初めて。
　店員さんもヒュンケルも私の意見を尊重しながら選んでくれるので、なんだか嬉しくなりながら選ぶ。
　ついつい顔が綻んでしまう。
　凄いな。
　毎日、いろいろな人と接しながら、その人に合う衣装を選び、購入者の気持ちを慮って勧める。
　この街でのんびりと店を見て回って、手に職を持つということがどんなことかを実感した。自分の店の商品を買ってもらうために、みんなが工夫をしている。
　大戦が終わり、ダイも見つかり……じゃあ、その後どうすればいい？
　戦後に各国の王達からという形で報奨金が出たけれど、それで働かずに暮らすというのは私の性質ではない。
　――――ヒュンケルと一緒にいたい。
　じゃあ、彼はこれからをどう考えているのだろう。
　パプニカ王国の城から出て……
　結婚して、彼のお嫁さんになって、彼の妻として……
　頬が熱くなるのがわかる。
　……わからないことは、相談しよう。
　未来の話を、ヒュンケルとできる。
　なんて、甘い事実なんだろう。
　ぐるぐると考え事をしていたら、ヒュンケルがいろいろと購入してくれていて、慌ててしまった。

結局……お金は一切出させてくれなかった。

◆

夜景を見る。
そんなことを楽しむ文化があるということに首を傾げたくなるが、所変われば品変わる……魔王軍や戦時下では夜間の明かりなど敵に場所を知らしめるだけだが、今は違う。
仕立屋で買い物をして、用もないのに他の店も見て回る。程々の頃合いで一度宿屋に戻って食事をしてから、また出掛けることにした。
宿屋の者にレオナ姫が勧めてくれた場所を聞けば、防寒をしてから出掛けた方がいいというので、マントを羽織って二人で出掛ける。

追い駆けられるように必死に走り続けてきたため、なにもなく、ただ夜景を見るだけという理由で出掛けるのがくすぐったい。
こんなに平和でいいのだろうか……自分が。
そういう忸怩たる思いに苛まれるが、これからは一人ではない。一人なら、己の感情だけに飲み込まれればいいが、マァムが一緒だ。
彼女を引き連れて、贖罪の道を歩む訳には……
いや、オレにとって贖罪は一生歩き続けるべき道。
でも……それでも贖罪をしつつ、マァムを笑顔にする道はあるはずだ。
それを一緒に探していけばいい。
手を繋いで、この街の中では比較的高台にある公園へ向かう。オレ達二人からしたら、それ程高い訳ではないが。
陽が沈み、夕闇が迫る。
高台の公園には展望台らしき場所があり、そこから街を見下ろせ

ばやさしい橙色の景色の中、それぞれの家の灯りが点（とも）されつつあった。
　二人して柵に手を置き、景色を眺める。
　ちらほらと灯りが増えて行く様は、この場所にそれだけ生活する者がいるという証。
「……綺麗ね」
「ああ」
　マァムの呟きのような声に、肯定する。
　周囲の橙色が徐々に消え、宵闇が街を包む。点る家々の明かり。煌々した石を机の上にひっくり返したような……
「……ひゃっ」
　小さな声に隣のマァムを見やれば、吹いてきた風に髪の毛が遊ばれ顔に掛かっていた。背後から「マァム」と声を掛けて抱き締め、マントの中に招き入れる。そして顔に掛かった髪の毛を梳いてやる。
「……あ、ありがとぅ」
　恥ずかしいのか語尾が徐々に小さくなるマァムに、微笑が浮かぶ。
　彼女の身長はそれ程低くはなく、鍛えているから体幹もしっかりしている。だからか、抱き心地がいい。
　愛する女性が……マァムがオレの腕の中に収まるのは嬉しいことだ。マントを右手に掛けるようにして彼女の肩を抱き、左腕で腹部を抱き締める。これで寒くないだろう。するとマァムがくすりと笑って、オレの右腕に両手を当てる。
「あったかい」
「……それはよかった」
　取り立てて会話もなく、更（ふ）ける夜を一緒に眺める。頭上には星も煌めき始めている。
　橙色が陽が沈むことによって薄紅色に変わり、宵闇の紺との境目を紫色が徐々に色を変えて薄紅色と混ざり合う。オレとやや薄いがマァムの色が混ざり合うというのは気恥ずかしい思いもするが、美しい。
「なんだか、不思議」

「なにがだ？」
「ヒュンケルと、こんなふうに夜景を眺めることができるなんてって……」
「ああ、オレもそう思う……」
　腕の中にあるぬくもり。目の前にあるやわらかい色の髪の毛に頬を寄せる。
「ヒュンケル」
　名前を呼ばれて彼女を見やれば、ついと唇に触れる熱。
　マァムが頬を染めて「ふふ」と可愛らしく笑っている。つま先立ちをしてのくちづけ。嬉しくて照れくさくて、オレはにやけそうになる顔面を堪えながら、彼女の頬に手をやって掠めただけの唇を堪能する。
　昨日はあんなに恥ずかしがっていたマァムも、またつま先立ちをして応えてくれる。
　やわらかくあたたかな、唇。もっと深く堪能したいが、すっと冷静になる。
「……他の人も、来たみたいね」
　マァムも気が付いたのだろう。
「ああ。宿の者も絶景スポットと言っていたからな……残念か？」
　名残惜しそうな彼女の頬を撫でて微笑めば、マァムは顔を真っ赤にさせて困ったように見上げてくる。でも、否定の言葉はない。それに微笑みを深くする。
　ああ、幸福とはこういう瞬間のことなのだ。
　心の底からそう実感する。
　愛し愛され、ささやかなことで心にぬくもりが生まれる。
　こういう時こそ、『幸福』と呼ぶのだと再実感する。
　――――　ありがとう。
　父の、やさしい声が耳に蘇る。
　――――　想い出を、ありがとう。
　オレも、腕の中の彼女にありがとうと言いたい気分だ。
「宿へ、帰ろうか」
「……ええ」
　マァムは戸惑っているようだが、確かに頷いてくれた。

◆

　宿に戻り、二人とも言葉少なに風呂に入る。マァムに「今日はヒュンケルが先に入って！」と言われたため、先に入って彼女が出るのを待っているのだが……長い……気がする。
　女性の入浴は長いというのは、比較対象が一人しかいないが知ってはいる。
　だが、あまりにも長い気がする。のぼせていないか心配だ。扉の外から声を掛けるのは失礼だろうか……悩んでいると、顔を真っ赤にさせたマァムが脱衣所から出てきた。
　身に着けているのは薄紫色のワンピース。
　オレがよく纏っている色を、彼女が身に着けているという事実だけで下腹部が痛い。
「……お、遅くなって、ごめんね」
「いや、いい。よく、似合っている」
　つい単語で話してしまう。
　マァムはそんな拙い、オレの褒め言葉にも満開の花のように笑ってくれる。
　昨夜……いや、今日からか……彼女の雰囲気がなにか違う。
　少女ではなく……女性になった。
　蕾だった花が、満開に咲き綻（ほころ）んだかのような美しさがある。
　彼女を暖炉の前まで案内し、宿屋の者に頼んだ香草茶を手渡す。お礼を言う笑顔も、なんというか甘えが混じっているようで、心臓に矢が刺さるような衝撃を受けた。
　香草茶を少しばかり飲んでから、マァムは「あ、あのね！　これからのことをヒュンケルと話したいのっ」とオレを見て言う。
　静かに頷けば、彼女は頬を染めて見上げてくる。
「私……アバンの使徒として戦うこと、ダイを探すことに精一杯

で、将来のことなんてまったく考えていなかった。今はね、ヒュンケルの傍に居たい。あなたを支えたいと思っている。でもね、具体的なことはまったく決めていなくて……ヒュンケルは、これからどうしたい？　あなたの考えを教えて」
　一生懸命に、言葉を尽くそうとしてくれているのを感じる。それがとてもあたたかい。
「オレは……一生贖罪を続けるつもりだ。自分の罪に向き合わないのはアバンの使徒として許されないことだから……だが、調子の良いことを言っていると思うだろうが、贖罪をし続けていても、おまえを幸福にすることは出来ると思っている。なにをどうすればいいのか……まだ明確にはなっていないが……」
　マァムがオレの言葉を聞いて目を見開き、そして愛くるしい笑顔を浮かべた。
「ええ。私も応援するわ」
　マァムの言葉に目を瞬かす。
　贖罪を応援すると言われたのは初めてだ。
　マァムはそんなオレの反応を見て小首を傾げる。可愛い。
「だって、あなたは誰がなにを言ったとしても、贖罪を続けるでしょう？」
　なにを、当たり前のことを言うのか……そんな彼女を思わず抱き締め……たいが、とりあえずはお互いの香草茶をテーブルに置いてから改めて抱き締める。さすが、オレの慈愛の天使。
　オレを抱き返して、マァムは「離れ離れなのはイヤだわ。できたら一緒にいたい」と囁く。
「ああ」
「……ねえ、他力本願になっちゃうけど、レオナにも相談しない？」
　少し体を離してマァムを見やる。
「姫に？」
「そう。あのね……あなたに謝らないといけないのだけど、フレイザードと戦った後に、ヒュンケルのことをレオナにほとんど話してしまったの」
　マァムは心の底から済まなさそうに、瞳を揺らす。

だが……
「いや、あの姫の性格だ……聞き出されれば、話さざるを得ない状況に追い込まれただろう？　誰でもない、オレのことを一番知っているマァムから話してくれたのであれば、それでいい。ありがとう」
　オレの礼に、マァムはふるふると首を左右に振る。
「ううん。でも、勝手にあなたのことを話してしまってごめんなさい」
　心があたたかくなって、マァムの頭を撫でる。
「わかった。謝罪は受け取る。だが、本当に気にしなくていい」
　自分でも表情が緩んでいるのがわかる。
　本当に気にしなくていい。そう思って頭を撫でていたら、マァムはほっとしたかのようにゆるりと微笑んだ。
「そうだな……確かに姫の意見を聞くのも良さそうだ。だが、オレ達でもきちんと意見を出し合ってから、聞こう」
「ええ、そうね」
「とりあえず……オレは姫の元に、パプニカ王国に何年も留まるつもりはない」
「どうして？」
「ハドラーが壮絶な最期を遂げたのをオレは見ていた。ダイやポップ……大事な弟弟子を守ってくれたのも見ているし、感謝もしている。だが、心の奥底の……あいつが父を殺したという想いは消えないし、消せないだろう」
「ヒュンケル……」
　腕の中の唯一が言葉をなくす。
「オレに大事な人を殺された人々は……なぜ、どうして、自分たちの家族を殺す前に改心しなかった……そう思っているはずだ」
　マァムは瞳を揺らして見つめてくる。
「ハドラーが亡くなって、オレはようやくハドラーを許していいとも思い始めている。だが、あいつが生きていたらオレはそう思えなかったはずだ……心根が狭いのは承知しているが」
「……そんなこと」
　ないと言えないマァムに対して、微笑が零れる。

やさしい彼女は、今、自分の大事な人が殺されてしまうことを想像しているだろう。
　そして、想像でも深く傷付く。
「ハドラーが、父のことを謝罪したら許すことができるか。という想像もしたことがある。オレには……答えがわからなかった。いや、考えたくないだけなのかもしれない。それを反転させれば、オレ自身が滅ぼしたパプニカ王国のためにすべきことが見えてくる気がするんだ」
「ヒュンケル……レオナが言っていたわね」

あなたには残された人生のすべてを
アバンの使徒として生きることを命じます……！
友情と正義と愛のために己の命をかけて戦いなさい
そしてむやみに自分を卑下したり
過去にとらわれ歩みを止めたりすることを禁じます……！

「ヒュンケルは十二分に、アバンの使徒として友情と正義と愛のために戦ってきたわ。でも、だからと言って、贖罪を止めてもいいのかは……わからない」
　わからないと、素直に言えるマァムが愛おしい。
　そして、人生のすべてを捧げるべき贖罪に彼女を巻き込むことを申し訳なくもなってくる……だが、手放せない。
　一度手にした幸福を、オレは二度と失いたくない。
「戦いなさいと、姫は仰った。謝罪を続けなさいではなく、戦う。アバンの使徒としての戦い方……とは、なにかを考えなくてはいけないな」
「アバンの使徒としての戦い方」
「戦うといってもいろいろある。姫が仰った時には戦う相手は魔王軍だった……だが、平和になった今の世で『戦う』とは、どう捉えればいいのか」
「そうね……」
　マァムは頷くと、オレに抱き付いてきた。
　隣に座っていたのだが、正面から……まるで抱っこのようにオレ

の首筋に顔を埋めてくる。薄いワンピースだけの体がぴったりとオレに抱き付く。
「マァム？」
　オレに甘えるような仕草に狼狽えつつも、耳元で名前を囁く。
「私ね……本当に視野が狭かったなって」
「視野が？」
「正義って、いっぱいあるのよね」
　すりっと首筋に頬を寄せられて堪らない。彼女の話に集中したいのに、男の体が別のことを求めようとしてしまう。
「自分の中の正義が正しくて、それと違うと叱りつけたりしてた。目線が変われば正義も変わる。もしも……もしもよ、本当にアバン先生がヒュンケルのお父さんを殺したとしても、あの頃のカール王国からしたら正義だったし、ハドラー軍からしたら悪だった。自分がどの陣営にいるかによって、正義なんて簡単に変わってしまう。正義って言葉……怖いわね。私、そんなことにすら思いやれなかった」
「そんなことはない」
「ううん……そんなことあるの。私はアバンの使徒として正義を貫いてきたつもり。でも、これからはあなたから見て、私が間違った正義を貫こうとしていたら教えて。私も、あなたが間違った方向へ行こうとしたら、絶対に止めるわ。一緒に行ったりなんてしない。必ず引き戻す、光の方へ」
「マァム」
「だから、安心して迷って考えて結論を出して。ただ、今のあなたなら間違えないって信じてる」
　信じてる。
　その言葉に腕の中の最愛を掻き抱く。
　まるで羅針盤のよう。
　マァムはオレにとっての道標だ。
「今すぐに結論を出さなくてもいいと思うの。ネイル村に着くまでの間にいっぱい考えて、今みたいにたくさん話しましょう」
　天使の笑顔に思わずくちづける。
　お互いの呼吸を奪い合うようなくちづけに、オレは背筋を震わ

す。気持ちいい。マァムが懸命に応えてくれるのも胸を打つ。

　光の方へ引き戻す。
　いっぱい考えて、たくさん話そう。
　そんなことを言ってくれる存在に、オレは心の中で騎士のように跪いた。

続く